

わば凡夫にひかれて現れ出でて用の仏となり現象佛となるところに存することを説示したものである。それに対して衆生の目ざす所は体の佛であり本佛となることであり、そして本体に歸入すべき衆生あるが故に慈悲救済の佛が引き出されるので、云いかえれば衆生によつて佛が呼び出されるのである。こゝに説かれてゐるものは、佛と衆生との間の力動的な相互媒介であり能動的な力用救済の論理であることを知りうるのである。

## 日蓮法華宗の現代的旗幟

浦 上 芳 武

十餘年前の法華会席上、今は亡き姉崎博士の「今の日蓮宗は鮮明なる旗幟を掲ぐる要あり」との言に共感して以來、この問題に関する私の思案は絶えず胸中に去來し、今以て簡明にして完全な成案を得たわけではないが、混沌たる世界情勢と世相の下、人心の不安迷信の横行を目前にしては何時迄も躊躇逡巡する能はざるを痛感し、宗門有爲の士と共に我等は、今の世に如何なるスローガンを以て教陣を布くべきかを提案すると共に、此処に私案を述べんとするものである。

共産黨のスローガンは多くの青年層に対する迫力に於て定評

あり、総選挙に臨む各政黨も亦國民の生活感情に呼應するスローガンを競い掲ぐる如く、日蓮法華宗も鮮明なる旗幟を掲げることは焦眉の急である。日蓮聖人及びその以後の教団にはそれがあつた。一々文々皆釈尊金口の説法と信ぜられた當時に於ては四十餘年未顯眞実とか、諸宗は無得道墮地獄の根元、法華經独り成佛の法等の標語は有力なるスローガンであつたと思はれるが、今日の民衆にとつては馬耳の念仏でしかない。しかも説き方によつては今日尙相當の迫力を持つものに現世安穩後生善処資生産業皆順正法等あり、或は病即消滅不老不死等も正當に心的に正解すれば必ずしも空言と言えない。教は現代の時、機乃至今日の世界狀勢下の日本國を對象とし、教法流布の前後國民思潮の動向等所謂五綱の教判を鑑みて説くべきものであるがこれは單なる読書士や机上の學者の爲し得る所ではない。衣食に窮せるかと思えばバチンコに意屈をまぎらす金はあつても、聽講無料の教にも耳を籍さず、他愛もなき迷信に易々諸々と金錢を投ずる複雑怪奇なる民衆は、活眼を開く法師と雖も容易に救済し難いであらう。しかも看過し得ざる大問題は仏滅後正像末三時に關し大集經を中心とする諸經と法華經との正反對な豫言を如何に會通し得るかである。即ち通明佛教は正法千年像法千年を経て衰退し第五の五百歳たる闍靜堅固の時代たる近代に及んで白法隱没すと説く大集經の豫言と、第五の五百歳に於て却つて「広宣流布して闍浮提即ち世界に於て断絶すること無けん」と豫言する法華經との明かなる矛盾である。しかも大集經の



豫言はそれ自らの經典の滅後流通を豫言してゐるのでなく全教法を豫言してゐるのであり、諸餘の經概してこの經說に一致してゐるのみでなく佛滅後の歴史上の事実もこの豫言に一致してゐるのであるから、法華經一部の豫言は無視され佛徒は諸經の多きに就き易きは當然である。

大体「末法」なる語の意味する所は「教」そのものが後世に至るに従ひ衰退し無力化するの謂であつて、一般文化や人智の衰退を意味するのではなく、寧ろ逆に教とは無關係に人智は発達するが只宗教的に無智であり邪智であり、その弊害に堪えずして社会的國家的組織の力即ち民衆自らの共同的団体的乃至法制の力によつて向上するものであるが、これを佛教的に解すれば衆生內在の本佛の力、内具佛性の自然的發露に因るものである。然るに教法とは本來釈迦佛がその當時の民衆に對し、その當時の言語文字や時代的感覚を帶びての隨他意のものであるから時移り世隔たるに隨ひ衰退するのが寧ろ當然である。だが衆生の迷情に隨順した教は攝受折伏共隨他意方便の教であり、これは時代の推移世の進運と共に衰退するのが當然であるが、佛意に隨順した教即ち隨自意の實教はこの逆であつても不思議はない。即ち佛は後代の賢哲よりも高き先覺者と言うに止まらず時代を超越した覺者であるから、その超時代的隨自意本懷の所説は後世各時代の賢哲學者の支持指導により且つ民衆各自の向上自覺も加わるに隨ひ、後世益々隨自意の教は受け入れ易くな

るに反し隨他意の方便教は受け入れ難くなるのが當然で、此処に法華經が別頭佛教たる所以がある。

これ隨他意經が隱沒する時、法華經が後五百歲広宣流布する所以と私は信するのであるが、只古典特有の表現乃至教相の時代的意義は各時代の民族意識に應じて取捨と活用が行われ有効適切に新鮮に表明されなければならぬと信する者である。

佛、隨他意の立場に立つて衆生界を觀れば、恰も火宅の如き三界に於て嬉戲に耽る童の如く、目前に迫る諸苦の火をも宛ら知らざるが如くなるが故に三界猶如火宅衆苦充滿と、人身の垢穢国土の不淨等の厭世觀を説いて警醒せしめたのが小乘教淨土教の苦觀不淨觀であり、四諦に於ける苦集二諦、無明緣起の十二因緣であるが、これは衆生をして出離を促さんが爲の方便であるから、これは佛教ではあるが佛道とは言えない。仏の本意は滅道二諦に入らしめるのだから、これこそ佛道であり隨自意の實教である。然るに淨土教は滅諦に至るが爲め八聖道の修行を自力難行道となし死後淨土往生後の修行として現生は只他力の念佛によりて現世穢土を厭離し只管死後十萬億土の彼方なる淨土を欣求せよと教え、キリスト教亦天国を欣求せよと教えるものであり、共に現実世界の外に理想世界ありとする二法相對觀に立脚する教なるに於て一であるが、これ実に無量義經が「二法あること無しと觀察すべし」との教訓に背くものである。

然るに法華經は苦集の現實を離れずして苦集即滅道、此土即



寂光、本佛体内の衆生に外ならずと二法の円融即一を明し、一方偏在の佛身佛土を求めず、十方一切常任の本佛と現実の此土本有の寂光淨土を欣求する教である。

誠に法華經こそ三界の火宅を離れて寂然として安處し得る我此土安穩天人常充滿常樂我淨の明緣起の真相を開顯した經であり、末法と難も上行等の本化の佛地辺の大菩薩相次で出現し、日月光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅するのであるから、淨土教の如く末法だからとて如来の遺弟悲泣するを要しない。「明かなること日月に過ぎんや淨きこと蓮華に過ぎんや、五蓮と名のこと自解佛乘と謂いつべし」の聖語の如く佛乘は明淨なのである。現実の仮相がたとい暗黒不淨であつても、それを心の対象として厭離輕蔑することなく、自他共に本有実相の尊貴明淨を信じて互いに深敬禮拜尊重讃歎する所やがて現実の淨化がある。「個の中若し餘想（地獄餓鬼等の惡想）の難え起らば、則ち其の想を顧みず、直ちに当念に於て南無妙法蓮華經と称し、只身心滯淨にして、凡卑に墮せざらしめん乃至大朗融妙の三千自在に顯現し自然に成就する明き佛教こそ但令用実の口蓮法華宗である。以上を旗幟として寺院教会の掲示板に掲示し布教の演題として詳説すべきではないかと信ずる者である。

（宗教を信ずるなら過去の時代の宗教よりも）現代將來の教典たる法華經を

（宗教を信ずるなら方便の厭世教や新興の怪宗教より）世界第一の大聖釈尊の最後眞実の明るい教

（一方偏在の淨土や天国よりも）十方一切常住の統一的本仏と淨土を信じましよう

（他方世界を欣求する暗い宗教よりも）人間乃至万有の真相を礼讃する明るい宗教を

（方便の易行宗よりも）眞実聖道の易行宗を

（身病めば心も病む心病瘉ゆれば身病も頓治）身病は最新の医学、心病は純一無雜の佛教で

（人生社会諸問題の偏見を去りて）一切論義の対立を円融歸一せしめる宗教を

（弱く暗き方便教よりも）強く明るい眞実の佛教を

（女人の禁制不成佛の方便教よりも）男女平等の人格完成の教を

（部分的一面の眞理の教よりも）全面的綜合統一の最勝王經を